



Title	障害児学級でのTEACCHプログラムの指導の試み
Author(s)	早瀬, 伸子
Citation	情緒障害教育研究紀要, 13: 37-42
Issue Date	1994-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9200
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

障害児学級でのTEACCHプログラムの指導の試み

早瀬伸子*

1993年4月に小学校の障害児学級に入級した自閉症児T君は、教室を飛び出すことが多かったが、簡単な指示に従え要求を指さしなどで伝えらることができた。筆者はTEACCHプログラムの指導原則に沿いながら、太田らのStage別認知発達指導課題を用いて指導を試みた。学級の時間割を毎日ほぼ同じにし、学習・運動・作業で活動場所を区別した。課題を単純で繰り返すものにし、一人でできるようにやり方を絵や図で示した。また、絵カードによるコミュニケーションを試みた。約3週間で「トイレ」の絵カードを使い12月には約30種の絵カードで要求や情報伝達・請求をするようになった。行動が落ち着き、待ちたり我慢ができるようになった。家庭でも学習し、音を聞いて平かなで教師の名前や果物の名前や数字を書くようになった。TEACCHプログラムの有効性が認められるので、成人後地域で一人で生活できることをめざして両親や他の教師等との連携のもとに指導を積み上げたい。

(キーワード：自閉症 情緒障害児教育 TEACCHプログラム 特殊学級)

1. はじめに

筆者は92年3月に5日間の大阪のTEACCHセミナーに参加した。TEACCHプログラムでは自閉症の行動には必ず根拠があり、それを周囲が理解していない点に問題があるという。自閉症を一つの文化として学び、その特性に応じた対応をして、成人後地域社会で自立生活することをめざしている。筆者は講師たちの静かで穏やかな指導と自閉症児の落ち着いた態度に感銘を受け、学級で実践したいと考えた。

92年に前任校で自閉症児2名をTEACCHプログラムの指導を試みた。個別スケジュールの提示やワークシステムの確立・行動分析が不十分で、学習に落ち着いて取り組むようになったものの、問題行動は改善できなかった。

1993年4月から現学級で自閉症児T君を主にTEACCHプログラムの指導原則で自閉症児の太田Stage別認知発達治療の発達課題と教材用いながら指導を試みた。

*石狩町立若葉小学校

2. 学級紹介

(1) 児童の実態

児童は1年生から6年生の11名(1年3人2年1人3年2人4年1人5年2人6年2人)で教師が3人で担当している。障害はダウン症(女1人)、知的発達遅滞を伴う自閉症(男1人、女1人)、学習障害(男1人)、精神遅滞(男5人、女2人)である。発達年齢は1歳半から8歳である。音声言語のない児童が3名、てんかん発作がある児童が2名いる。

(2) 学級経営の方針

担任三人で親や教職員・関連機関と協力し児童の発達段階・興味・関心などを把握し教育内容・方法を相談しあい、可能性を引き出し発達を援助できような指導に努める。

(3) 指導目標

- 1) 基本的な生活習慣・行動パターンをその時その場で指導し習得させる。
- 2) 意欲的に楽しく一人で取り組める教材で運動能力・認知能力・作業能力を育成する。
- 3) 交流教育などで対人関係・社会性を育成する。

3. T君の指導

(1) 生育歴

T君は85年10月に帝王切開で生まれた。1才半で発達相談を受け障害児幼児教室に通園した。2才で医療機関で自閉症と診断され、4才から私立幼稚園に通園、6才で小学校障害児学級に入級した。父(41)も母(36)もT君の障害を理解し可愛がり協力して育てている。

(2) 障害の状況 (小学校入学時)

簡単な指示は理解できるが言葉はない。要求は指さしなどで伝え、固執する。運動能力は高く手先が器用である。集団に入るが一緒にの行動をせず飛び出す。ストレスで手の甲を噛む。

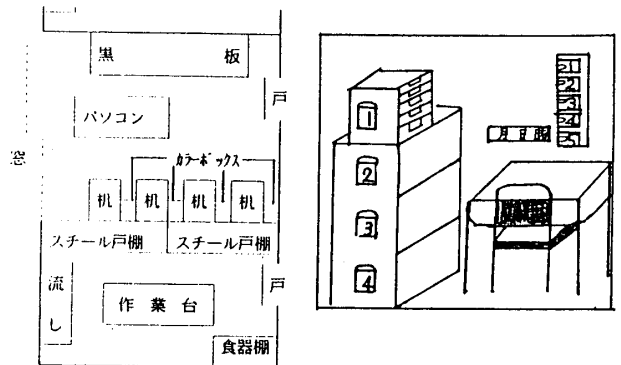
(3) 指導目標

- 1) 絵カードでコミュニケーション能力を育成し問題行動を減少させる。
- 2) 生活年齢に準じた生活習慣・基本的行動様式の形成し社会性を育成する。
- 3) 運動能力・認知能力、作業能力を育成する。

(4) 学習環境

1) 教室配置

障害児学級は三教室ある。中央の教室で朝の会・給食・帰りの会と音楽・図工・習字・理科・学習の授業をする。右の教室はプレイルームとし体育・仕事・学習の授業をする。左の教室はスチールの戸棚で半分に仕切り、半分は教材庫、半分は学習室である。学習(ことば・かず)は能力別に3グループにわけている。T君は1年生2人(精神遅滞)と4年生1人(自閉症)と学習室で学習している。一人ずつ課題内容・教材・教具が違うので、余計な刺激が入らず課題への集中を高めるため、黒板を背にしスチール戸棚の背面に机を置き、一人ずつの教材を入れたカラーボックスで仕切った。各自の場所は名札や箱の色で明示した。指導は児童の後ろから言葉を少なくし具体的なやり方を示すようにした。一学期は各児童の実態・課題を把握できず適当な教具を提示できなかった。少しずつ各自に応じた教具を見つけ、10月位から各自が机に座り教具を出し自分から学習するようになった。



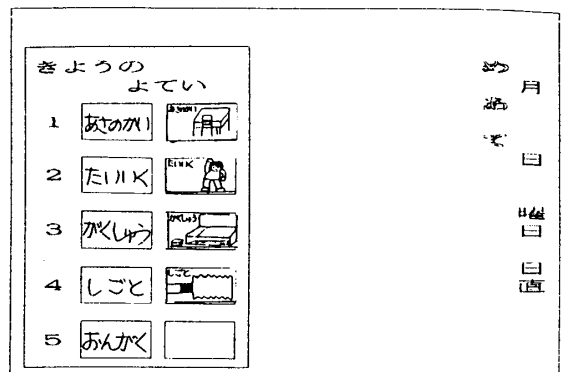
2) 時間割

朝の会でその日の時間割を予定黒板に平かなカードでつけ言葉でも伝える。二学期から予定黒板に絵カードもつけた。携帯しているカードの中からも、その時間の絵カードを見せる。

週時間表

曜日	月	火	水	木	金	土
時	(登校:15) 交流学級で朝の会					
1	朝の会 (日常生活指導)					
2	体育	体育	体育	体育	体育	調理習
	中			休		
3	学習	学習	学習	学習	学習	調理習
4	仕事	仕事	図画	音楽		
	給食 (交流学級が学級)					
一年下校 13:15	昼					
5	音楽	仕事	習字	図画	理科	
6		委員会			クラブ	

合同学習室黒板



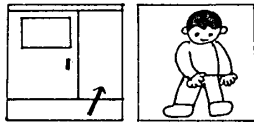
平かなカード 絵カード

4、指導経過

(1) コミュニケーション能力の育成。

1) 第一期 (5月-7月)

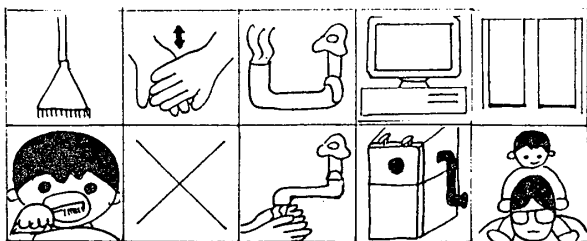
T君の教室からの飛び出しとグラウンドなどトイレ以外での排泄をなくしたいと考えた。「トイレにいきたい」と「教室から出たい」の絵カード(白表紙8×8センチ)を作成した。



それをT君のズボンのポケットに入れ、トイレに連れていく時や休み時間に教室から出てよい時に見せた。T君がカードを見せた時は、その要求通りにした。約3週間でトイレの絵カードを使い、トイレ以外での排泄は6月以降なくなった。「出たい」の絵カードは約1ヶ月半後に使った。

2) 第二期 (8月-10月)

T君の要求伝達・行動選択の範囲を広げたいと二学期から要求伝達の絵カードを20種にした。絵カードは時間割カードと同じものや「ちょうだい」や「ダメ」や「水を飲む」などの要求カードや「パソコン」や「鉛筆を削る」などT君が好きな活動にした。カードの右上にパンチで穴あけリングを通しT君のズボンのベルト紐につけた。

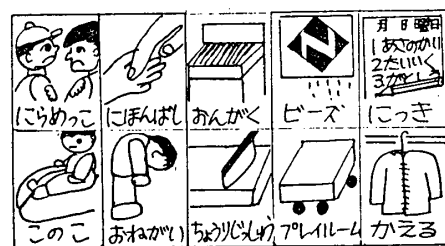


T君は親子調理実習で「水を飲む」「トイレ」のカードを出して意志表示し、カードを1ヶ月で使いこなして、母を感心させた。「ちょうだい」の絵カードを出して、鋸を引くジェスチャーをしたり、「ブランコ」の絵カードを出すので、勉強が終わったらねという、納得してプリント学習を始めるなどコミュニケーションがとれるようになってきた。家でも聞き分けがよくなり落ち着いてきた。

9月に家で母とボール遊びをし、10月から教師に「にらめっこ」や手遊びなどのやりとり遊びを要求した。「出る」のカードを出し、すぐに自分で「ダメ」のカードを出した。級友の遊びの誘いで一緒に遊具で遊んだり、おんぶのジェスチャーをしてやってもらうようになった。

3) 第三期 (11月-12月)

10月末T君が絵カードを忘れたとき、「パソコンしたい」の要求を黒板の字を見て書いた。そこで11月から文字によるコミュニケーションをねらって、絵カードの下に平かなを書いて持たせた。



11月始め、卒園した幼稚園での個別指導で、T君は要求するとき「オ(お願い)」と発音していた。学校でもT君がカードを指さす時に相手の肩を叩き「オ」と発音するようにした。12月にパソコンの絵カードで指さしたのでパと言うようにいうとT君は「パソコン」と書いた。発音するより字を書くほうが易しいようである。「オ」「チ」「パ」「バ」がでるようになった。

11月半ばにT君が30枚近いカードから選択するは大変だろうと思いT君がよく提示する12の絵と字を一枚のカード書いて持たせた。T君は少したつとでそのカードをいやがって投げるようになった。どちらがいいか選ばせると30枚の絵カードを取ったのでそれを持たせた。

T君は服を少しでも濡らすとすぐ着替える。12月末に手を洗い服を濡らした時に上着の絵を書いたカードを指さして着替えた。自分が何をするか伝える「情報提供」で使用したと思う。

12月末体育館の終業式で「たいいく」の絵カードを出した。筆者が「朝の会」のカードを見せると静かに参加した。何をしているか確認し「情報の請求」に使用したと思う。

12月末にT君は「出る」のカードを出し 教室から出て自分で戻ってくるようになった。

筆者はT君の行動を予想し対応ができるようになってきた。T君は活動時間が長かったり、自分の思っているパターン通りにならないと大声をだしたり、泣いたりすることがある。

T君は学校と家庭の学習で、音を聞いて平かなで教師の名前や果物の名前や体の部分を書くようになった。今後携帯できるようなミニホワイトボードにT君が平かなを書いてコミュニケーションするように指導していきたい。

(2) 社会性の育成。

T君は基本的な生活習慣（衣服の着脱・食事・排泄）などは自立している。6月以降トイレ以外で排泄しなくなった。名前を呼ばれると手をあげ、「お早よう」といわれるとおじぎをし「さよなら」といわれると手をふる。10月から級友におんぶのジェスチャーをしオンブしてもらっていた。給食のストロー配りの仕事や拭き掃除等の仕事を自分からするようになった。家で10月から自分でパジャマを着るようになり、アイロンをかけたり父にビールを出すようになった。

集団の中に静かにいるようになり 行事に参加できるようになった。6月の運動会で学級低学年徒競争で一位になり 低学年リズムも列の中にいた。9月半ばから学芸会の劇の練習を始めた。台本を指さすと練習をする教室に移動し衣装を着た。練習は始めの2回位は参加しお面もつけた。学芸会の日「舞台にずっといて良かった。」と母が話し、校長も「がんばっていた。成長したな」と話してくれた。

12月、家庭と協力しファスナーをおろし排尿するのが2週間できるようになった。

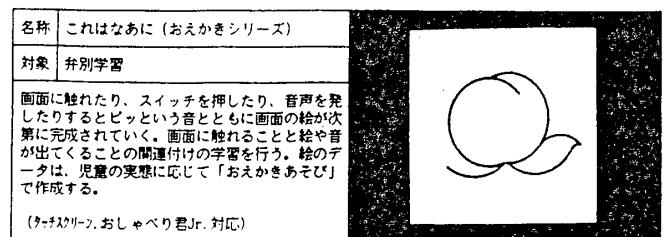
課題を視覚的に提示し 先生の指示待ちをせず一人でできることを多くいき 小集団で行動できるようにするのが今後の課題である。

3) 認知力・表現力の向上。

T君は3歳位から企業のマークに興味を持ち母に書かせ 入学時に好きな企業のマークと字

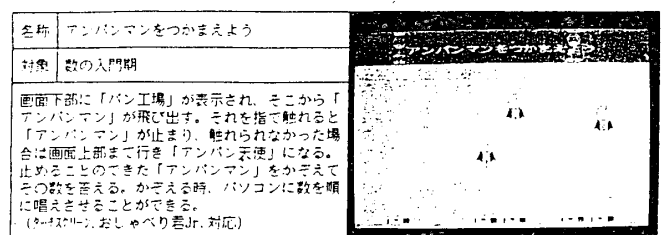
や平かなで自分の名前が書けた。

重点目標の「目と手の協応」を「1対1対応」でマッチングする一人でできる教材で学習した。同じ色の洗濯ばさみを画用紙に塗った色に止めたり 大きなビーズを画用紙の絵と同じに置き紐に通した。好きな企業のマークを「ハマモザイクSビーズモザイク」（株式会社ボーネルンド）の小さなビーズで作って アイロンをかけた。数字の型はめで数字を選んではめた。1-5の数を聞いて書くようになった。

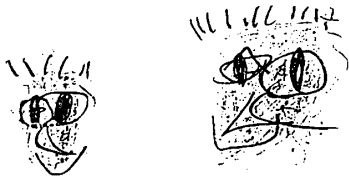


描く基礎として プリントで線や自分の平かなの名前をなぞりや塗り絵をした。指さしを具体物で練習した。T君は6つの絵を選べるようになったので 後Stage IIの「シンボル機能の芽生えの段階」の課題をした。絵カードで用途で物を理解する学習や色板と中が透明な形板で色と形の統合の学習をした。

岐阜県立関養護学校平光先生作成のスペースキーを押し続けると画面に絵が出てくるパソコンのソフトで名詞を確実にする学習をした。飛んで行くアンパンマンを画面（タッチパネル）を押さえてつかまえるソフトを「目と手の協応」としてした。T君は休み時間にもやった。他の児童がしているを見て笑ったり 順番を待った。約3ヶ月後つかまえたアンパンマンを指で押さえ出した数字と音で数は左から右に数え右端がその数だとわかり下の数字と対応した。



7月に見本を見て顔をかいた。その日家でも自分から顔をかいた。



イメージを豊かにしようと朝の会で週二回読んでいた紙芝居を11月から持続して見るようになった。まついのりこ作「おきくおおきくおおきくなあれ」「ごきげんのわるいコックさん」(童心社) やかこさとし作「チョコレートカステラだいじけん」(童心社) を喜んだ。

10月からは週1回絵本の読み聞かせを始めた。平山和子作「くだもの」(福音館) を見て同じ果物の絵カードを取り 食べるまねをし 他児にも食べさせようとした。まついのりこ作「じゃーじゃーびりびり」(偕成社) を見て 掃除機の絵カードをその頁に置き 掃除機の音を言ってもらいたかった。わかやまけん作「しろくまちゃんのほっとけーき」を見て家でホットケーキの材料を何度も用意した。

田口恒夫編「言語能力発達検査」結果でT君は人への関心は「人に食べさせて喜ぶ・イナイナイバーの遊びを楽しむ・子供同士でふざけるなど」ができて2才、認知表象能力は「顔らしい物を書いて目・口などをつける」ができて3才、文の理解は「物の用途がわかりやってしまったらねなどの言葉を理解する」ができ2才6ヶ月、書く能力は「自分の名前を平かなで書く」ができ5才だった。

用途で物が指させるようになったので 10月からStageⅢ-1「シンボル機能がはっきり認められる段階」の課題を学習した。絵カードの動作語、シール絵本で果物屋・肉屋・魚屋に品物を区別して並べる、大小の皿に果物の大小を区別して置く、「さんすううだいすき」(ほるぷ出版)の上中下・左中右の型はめで概念形成の学習をしている。

10月半ばからコロロE Tセンターの「発語までの学習課題分析 文字による発語学習」と同じ方式での指導もとり入れた。プリントで教師や果物の平かなの名前を平かなカードで対応させ模写させた。家でも同じように学習し 聞いて書けるようになった。果物の絵と絵カードは対応できるようになったが 教師の名前と写真の対応は確実にならなかった。

二学期に連絡帳や日記の置いてある棚から自分の名前を見て持ってくるようになった。筆者に連絡帳や日記や雨具掛けの級友の名前を声を出して読むように要求するようになった。

11月から平光先生作成の音声の出る「平かな」のソフトを休み時間にもするようになった。

名称	どれにしよう(おえかきシリーズ)	
対象	弁別学習	
画面の横3つの位置に1〜3枚の範囲で絵が表示される。その一つに触れると、効果音とともにその絵が大きく表示され、最後にその絵を表す単語をパソコンが発声する。弁別学習の導入として利用できる。絵のデータは、児童の実態に応じて「おえかきあそび」で作成する。 (7才〜12才)・おしゅべり君Jr.対応		

名称	かるたあそび(おえかきシリーズ)	
対象	ひらがな入門	
「おえかきあそび」で作成された絵が、描かれた順に現れる。右側にひらがなが3枚表示されるので、その絵を表すことばの語順の文字を、画面に触れて選択する課題である。絵を表示するかわりに「アンパンマン」をなぞっていくとひらがなが完成するので、それと同じ文字を選ぶといったマッチングの課題としても利用できる。 (7才〜12才)対応		

名称	ことばのよみ(おえかきシリーズ)	
対象	ひらがな入門	
「おえかきあそび」で作成された絵が4枚、左側に表示される。右側に2〜3音節の単語が表示されるので、上から1文字ずつ順に指で押しながら単語を読んで、それを表す絵を画面に触れて選ぶ。設定によって、1文字ずつ指で押さえた時に、その音節をパソコンが発声させることができる。 (7才〜12才)・おしゅべり君Jr.対応		

名称	どんなことば(おえかきシリーズ)	
対象	ひらがな入門	
画面右側に2〜3音節の単語が表示される。左画面のランダムな位置に、その単語を構成するひらがなが表示されるので、画面に触れて正しい順にひらがなを選ぶ。ひらがなの選択が終わると、その単語の表す絵が画面に大きく表示される。ひらがなを選んだ時、その音節をパソコンが発声させることができる。 (7才〜12才)・おしゅべり君Jr.対応		

10月から家で父に平かなを書いて発音するように要求し 12月に父が言うと平かなの50音や「あし」「て」「くち」など書くようになった。

T君が自分一人で学習できる体制を作り 文字・数を生活にいかし役立てるように指導していくのが今後の課題である。

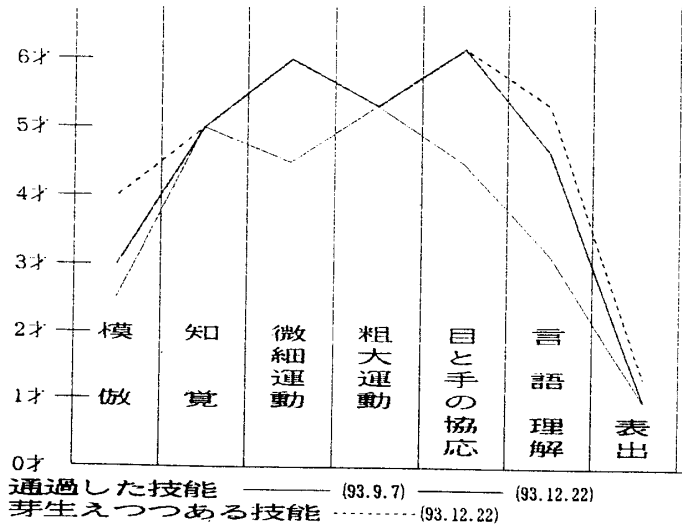
5. 指導結果

(1) 発達検査結果

PEP検査結果

(93. 9. 7実施 総合発達得点51 3才 1ヶ月)

(93. 12. 22実施 総合発達得点67 3才11ヶ月)



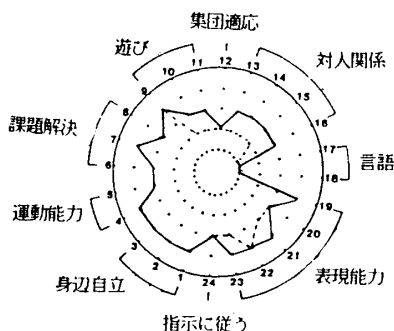
9月の検査結果と比較すると

- (知覚) (粗大運動) 全項目できていた。
- (模倣) 発声模倣ができるようになった。
- (微細運動) 全項目できるようになった。
- (目と手の協応) 字の模写など全項目できるようになった。
- (言語理解) 色・大小・平かなの区別ができるようになった。
- (言語表出) 音の模倣がやはりできなかつた。

T-CLAC PSYCHOGRAM結果

(--- 7月6日実施 ——— 12月20日に実施)

T-CLAC PSYCHOGRAM検査結果
 (93. 7. 6) (93. 12. 20)



7月の検査結果と比較すると

- (遊び) 大人や子供に誘われ遊ぶようになった。
- (対人関係) 自分のペースに合わせてもらうと相互作用できるようになった。
- (表現能力) 平かな・顔がかけられるようになった。

6. おわりに

ノースキャロライナで1年間TEACCHの研修をした佐賀大学付属養護学校の原口智子先生にT君のビデオを見ていただき、T君が教師の視線指示で動いているので、一人で自立的に判断し行動できるような指導法を実例を示しアドバイスをいただいた。筆者のTEACCH理解の不十分さが反省させられたが、その有効性も感じる事ができた。今後も二十歳を射程距離にし一人で地域で生活できるように指導を積み重ねたい。

T君は視覚的に提示するとパターン化しやすいタイプの自閉症で、家庭の熱心な指導と協力で、持っている力を発揮し目にみえて変わった。筆者はT君の変容に驚嘆し指導が楽しみだった。学級の他の児童も同じ指導法で力を伸ばしたと思う。学級の児童一人一人の実態に応じた指導方法・内容にできるよう他教師や関係機関や家庭と協力し実践していきたい。

最後にこのような実践ができたのは学校長・他障害児学級担任・T君の両親の協力のお陰だと心から感謝している。

文 献

- 1) ショプラー他、佐々木正美監修(1990)：自閉症の療育者，神奈川県児童医療福祉財団
- 2) 太田昌孝他(1992)：自閉症治療の到達点①，日本文化科学社
- 3) 太田昌孝他(1992)：自閉症治療の到達点②，認知発達治療の実践マニュアルー自閉症のStage別発達課題ー，日本文化科学社
- 4) ショプラー他(1984)：親と教師のための個別教育プログラム，星和書店
- 5) ショプラー他(1988)：自閉症児の発達単元267，岩崎学術出版
- 6) 岐阜県立関養護学校コンピュータ委員会(1993)：肢体不自由学校におけるパソコン活用実践集録，岐阜県立関養護学校
- 6) コロロETセンター(1992)：発語までの学習課題分析文字による発語学習，コロロETセンター